

令和5年度 友松会総会 【報告】

日時 令和5年6月25日(日) 13:30～
会場 新百合トウエンティワンホール

友松会スローガン「深まろう 高まろう つながる会員 つながる大学」
～ 新しい時代にふさわしい豊かな活動を ～

＝ 総 会 次 第 ＝

第Ⅰ部 総会

開会のことば 国歌斉唱 物故会員への黙祷
会長あいさつ 実行委員長あいさつ
来賓祝辞 来賓紹介・祝電披露 会務報告
卒寿会員紹介 松沢研究奨励賞贈呈
閉会のことば

第Ⅱ部 研究発表会

開会のことば 発表者・講師紹介
研究発表及び質疑応答・講評 閉会のことば

第Ⅲ部 次年度総会に向けて

師範学校校歌斉唱 学生歌「みはるかす」斉唱
次期総会開催ブロックあいさつ
閉会のことば

小島 勝 会長あいさつ (要旨)

本日の総会を開催するにあたりご尽力いただきました川崎ブロックの皆様には感謝申し上げます。会場についても100名以上の方を収容でき、交通の便がよい場所ということで、手を尽くしていただき、やっとこの新百



合トウエンティワンホールに決まりました。決定時点ではコロナ禍でもあったので参加人数を制限し、ご来賓の方も昨年と同様に木村昌彦学部長、歴代会長に限ってご臨席いただきました。来年こそは、参加人数を制限することなく開催できたらと思います。

会誌「友松」の今号から全ページがカラー化されました。記事の割り付けや校正などすべてを弘報部が担当しています。印刷と製本だけの発注となり、経費がかなり削減できました。その他の部会も会員の皆様のために豊かな活動を行っています。

本年度の「新春のつどい」ですが、来年1月28日にローズホテルで開催予定です。11月末には、皆様にご案内できるものと思います。

先々週の土曜日、4年ぶりに今年度第1号の支部総会が藤沢で開かれました。昨日も横須賀の支部総会があり、参加させていただきました。事業や予算の報告はもとよりシンポジウムやウエスタンミュージックの生演奏など和気あいの総会が行われていました。そして、集まった方々がロ々に「久しぶり」「お元気でしたか」などといった光景を目にしたり耳にしたりし、「同窓生っていいものだな」と改めて実感しました。仲間と再会できることを楽しみに各支部で総会を開催してください。

さて、友松会の取り組みについてです。

ここ数年の懸案であった特別会計の中の研究奨励金運営規程を改定しました。先輩からの寄付金を原資として松沢研究奨励賞の受賞者に支出されていた「研究奨励金の運営規定」については、プロジェクトチームで一年間かけて検討し、先日の理事評議委員会で承認いただき、今年6月1日から施行しております。(詳細は「友松」113号P37に掲載)

次に母校横浜国立大学は来年で創基150周年を迎えます。教育学部としての記念事業としては、学生歌「みはるかす」の歌碑を建立することにし、現在寄付を募っています。

最後に、今年の横国Dayについてです。内閣府が主催する「防災国体2023」が、9月16・17日に国大を会場に開かれることにあわせて行われることになりました。友松会として従来行われていた「豊かな教育を考える会」について役員会で検討した結果、今年は開催を見送ることにしました。なお、校友会総会や交流会、プラウド卒業生の表彰式などは実施されます。

本年度も役員一同、友松会そして大学の発展のために「できることから着実に」取り組んで参りますので、会員の皆様のご理解とご支援を賜りたいと思います。

▽来賓祝辞▽ (要旨) 横浜国立大学教育学部長

友松会名誉会長 木村 昌彦 様

今の大学の学部の状況ですが、かつては500名あった定員が今は200名です。



教員採用率が高まらない状況にあります。それまでの5年間はワースト1位でしたが令和2年度は下から2番目でした。ところが、令和3年度は教員養成課程のある全国の国立大学の中でまた最下位になってしまいました。学生の質が落ちているわけではなく、優秀な学生も多くいて、一部上場企業にもかなりの人数が就職しています。

今、入試改革を進めていて、本当に教員になるという高校生を採ろうと大きく変えました。まだ卒業生が出ていないので今後の情勢を見ていきたいと思います。

学長は今年で3年目になります。教育学部に一番理解と支援と喝を入れてくださる方です。「総合大学の中で日本の教育学部にしよう」というのが合言葉です。今一番誇れるのは教職大学院の入学率です。全国の総合大学で教職大学院の定員確保ができていないところが多くある中、本学においては100名近くの学生が受験し、3年連続60名の定員を満たしています。また、2年連続で3年生からの飛び入学も生まれています。

今日のオープンキャンパスには500名以上の生徒がきていました。みんな目がキラキラしていました。そんな生徒たちに、本学には教員の質を高めて全国に送り出す役目があることを強調して話をしました。学校現場には毎日いろいろなところに感激の種が転がっていて、教員はそれらをしっかり見つけ芽吹かせる。こんなに素晴らしい職業はなく、感激・感動・感謝がいっぱい詰まっている。また、子どもたちの悲鳴をキャッチすることも大事な仕事であるということをお話しました。

学校現場には声にならない悲鳴の種もあります。それらをしっかり見つけてどうするかを考えられるようにすること。そのために、本学は、

偏差値ばかりを重視するカリキュラムではなく、感性を含めた様々な力を育てる授業を用意しています。

最近、認知と非認知ということが話題になっています。私は認知と非認知をしっかり絡めて教育することが教員養成には重要であると考えます。本学も横浜市と連携して研究を行っていますが、その中でも認知的な能力を高めることが有益だと言われています。

また先日、灘高校の前校長と対談することがありました。灘高校では、「文武両道」とは言わずに「緯武経文」(いぶけいぶん)と言うそうです。つまり、縦糸(緯)に武、横糸(経)に文。これでどれだけしっかりとした布を織りなせるか、これが大事であるとおっしゃっていました。教員養成でも考えなければならない問題だと思いました。

これからの教員養成は多岐にわたるものと思います。私も5年前まで附属鎌倉小・中学校の校長を6年間務めました。その時が私の30数年の教員生活で一番充実していました。

そして、学校現場で自分の考えをどれだけ生かすことができるかが大事だと思いました。また、臨機応変に対応する力や伝える力も重要だと思いました。だからこそ、私たちは学び続けなければならないのだと思います。

友松会の先生方には、いつもお世話になっています。これからも本学の学生をはじめ私たち大学教員に熱いまなごしでご指導いただきたいと思っています。

私達も皆さんと協力してよりよい教員を養成し全国に送り出したいと思いますので、教育学部へのご支援をよろしくお願いいたします。

▽松沢研究奨励賞贈呈▽

令和5年度

秦野市立大根小学校総括教諭 高橋 正臣
川崎市立西菅小学校教諭 吉田 啓





〈研究発表1〉

秦野市立大根小学校総括教諭 高橋 正臣 氏
研究主題

「プログラミング教育につながる取り組み」
～プログラミング教育って本当に新しいもの?～
質疑 (要旨)

(質問1) プログラミング教育の「困り感」を聞かない。「物を動かす」ではなく「プログラミング的思考」が大事とあったが、現場は今どうなっているか。現状と先生の思いをお聞きたい。

(発表者回答1) まだ各市町の教委・事務所単位で、少しずつ取り組みが広がっている過渡期の状況と思う。県内では相模原市など、教委が年間計画や教材・教具や指導案を用意するなど環境整備がされている所もある。出来る所から取り組むことが大切だと思う。

(質問2) 話題のチャットGPTをどう捉えるか。文科省から歯止めをすとの話も出ているが、いまさらストップをかけるのかという思いもある。

(発表者回答2) 個人的な見解だが、「検索」とほぼ変わらないと思う。今の子どもは生まれたときから機器に触れ、アプリやYouTubeをやっている。子どもから取り上げるのではなく、利用して取捨選択の能力を育てる方が大事だと思う。

講評 (要旨)

秦野市教育委員会教育研究所 市川 潤一 所長
「プログラミング」教育とは、指導要領総則の「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」の項目に「児童がプログラミングを体験しながら、コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力を身に付けるための学習活動」と説明されている。

新型コロナウイルス感染症対応のため、プログラミング教育はなかなか進んでいない現状がある。高橋先生の実践は、先生の工夫を含めた「アンブ

ラグド(電源プラグに繋がらない=機器を使わないの意)な実践」として理科のフローチャートの実践やPCの画面上で体験するビジュアルプログラムの取り組みなどは、今後生かせる意義深い実践であった。

本発表の副題は「プログラミング教育って本当に新しいもの?」となっている。小学校段階では、プログラミング体験が目的ではなく、これを通して、コンピュータに適切な処理をさせる論理的思考や問題解決力を身につけさせることが目的である。その意味ではこれまで大切にしてきた力を身につける一つの手立てとして捉えられる。しかし「新しいものではない」が、児童がコンピュータをほとんど用いないということは望ましくない。その背景には、ICT技術の進歩と変化の激しい社会状況に活躍できる人材を育てたいというねらいや思いがある。

チャットGPTの質問を頂いた。利用規約では13才未満は利用不可となっている。現在、文科省は生成AIを教育でどう取り扱っていくかガイドラインを作成している。不適切な使用例として、小論文での利用、調べ学習での安易な使用、学習評価に係わる部分での使用などが挙げられている。使う使わないの話も大切だが、どう使うかを考えることで、本当の意味で情報活用能力を育むことが大事だと考える。



〈研究発表2〉

川崎市立西菅小学校教諭 吉田 啓 氏
研究主題

「どの子どもも投げる楽しさを味わえる
授業作りを目指して」
～陸上運動「投の運動」の実践～

質疑 (要旨)

(質問) 新しい領域の中で入ってきたということで経験不足でもこの単元に取り組んで良いということですが、どのくらい子ども達の姿を見られ、どのくらい経験を積むと動きが変わるようになりましたか。

支部の方で、学年が多岐にわたって取り組んでいたが、2年間の実践の中でどのような取り

入れ方をしたら効果的であるか詳しく教えて欲しい。

(発表者回答) 男子14人女子6人の偏ったバランスのクラスであった。投げたことのない子もいた。女子を中心に毎時間授業の頭と終わりでワイヤーショットを取り入れて5時間経験すると記録が伸びてきた。すべての学年に取り組んでいくことは難しさもありますが偶数学年にやると価値があります。

6・7・8時間続けてやるとシンプルになるので、子ども達には無理があると思う。4・5時間で他の単元に比べると短めであるが実感できる展開ができると思う。

講評(要旨)

横浜国立大学教育学部 伊藤 信之 教授

吉田先生は、自分で目標をもって頑張っていた姿が印象に残っている。彼がやろうとしていることは自分のためになった。プラスの方向で考えていく姿勢がある。本日は素晴らしい実践でありがたいと考えている。

有名な世阿弥の言葉に「子どもが自然に行う動作はその子が生来もっている長所が発揮され

る。まかせて自由にさせるべし、手の込んだものを教えたり、ああだ、こうだと直したりしてはいけない。子どもはやる気をなくしたり、おっくうになったりして大切な能力が伸びなくなってしまう。」というのがある。

やみくもにやってはいけないが、適切にめあてを工夫して子どもに与えることは重要である。目標と現状を考えた時、子どもが体育の時間にやる気を失ってしまう。うまくいかない場合には目標が明確にもてない。現状についても本気を出していないということがあるかと思う。

ギャップを問題点と考える時、条件設定が必要である。知識力・直感力・想像力・知覚力を踏まえていきながら実践を行う。クラス全体で伸ばしていくという意識をもって、なおかつ自分の考えをもつことが大切である。

